

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 29 日現在

機関番号：37602

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520850

研究課題名(和文)古代地域社会の識字と文字文化の展開に関する研究 - 西海道を中心に -

研究課題名(英文) A study on development of literacy and literate culture in ancient regional society focusing on Saikaido region

研究代表者

柴田 博子 (SHIBATA, HIROKO)

宮崎産業経営大学・法学部・教授

研究者番号：20216013

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：陶硯と転用硯、墨書土器との関係から古代地域社会の識字と文字文化の展開の様相を検討した。使用痕跡を確認すると、未使用の陶硯だけでなく未使用の転用硯も少なからず存在する。前者は権威の象徴であるが、実用品である後者は硯として使用するための調整を済ませた段階のものと考えられる。また陶硯や転用硯を出土する遺跡では文字種は多いが墨書土器は大量でなく、逆に大量の墨書土器出土遺跡では文字種・転用硯とも少なく墨溜めが出土する傾向が窺え、文字使用活動の様相に違いがみられた。

研究成果の概要(英文)：Aspects in the development of literacy and literate culture in the ancient regional society were studied in relation to excavated 'token' or pottery ink slab, 'ten-yoken' or dish-diverted pottery ink slab and 'bokushodoki' or pottery with ink inscriptions. Besides unused 'token', a certain number of unused 'ten-yoken' were found when examined closely. 'Token' are thought to remain unused because they were the symbol of power; while unused 'ten-yoken' of practical use are regarded as the ones honed to be used as ink slabs but stay unused. At a site where 'token' and 'ten-yoken' were excavated, 'bokushodoki' were not found in abundance, but the variety of character used is rich. On the other hand, at a site where a large amount of 'bokushodoki' was excavated, character used does not vary widely and little 'ten-yoken' were found, but 'sumidame' or pottery palette tended to be excavated instead. This suggests the aspect in activities using character differed between those sites.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：出土文字資料 墨書土器 陶硯 転用硯 古代西海道

### 1. 研究開始当初の背景

長く文字を持たなかった日本列島の社会に、文字(漢字)が導入されたことにより、社会は大きく変化した。7~8世紀、律令国家の成立にともなって文書による行政が始まり、文字使用は本格的に広がった。そして統一国家の支配体制を支え、さらに漢字から仮名を発生させて今日に至っている。

日本古代史では文献史料に限られており、木簡や墨書土器など出土文字資料の重要性が広く認知されている。このうち木簡は紙と併用されて文書としても用いられるものであり、「千字文」「論語」を練習した記載がみられるなど、実務官人の識字の様相を直接的に窺うことができる資料である。いっぽう墨書土器については、これまで出土量の多い関東・東国地域を中心に進められてきた研究において、集落遺跡における墨書土器の広がりが必ずしも識字の広がりを意味しないという、重要な指摘がなされてきている。

西海道地域では、木簡は大宰府を中心とする筑前国には相当量の出土がみられるが、それ以外の諸国では出土遺跡数・点数とも極めて少ない。木簡は、土中で遺存するには一定の条件が必要であり、保存状態に恵まれなかったため滅失したものも多かったと想定される。これらのことからすると、木簡だけで識字の地域性を検討することは困難である。

いっぽう土中で分解されない墨書土器は、西海道の全域で、しかも旧国単位でも数百点から2000点以上と相当数の出土がみられるものの、前述のように集落遺跡出土の墨書土器は識字の広がりとは捉えられない場合がある。したがって木簡の出土がまだ少ない地域においては、墨書土器以外の、識字の様相を検討できる材料が求められる。

陶硯や土器転用硯は、紙や木簡に文字を記載しようとする際に不可欠な文房具であり、しかも墨書土器と同様に地中で分解されないため、木簡の出土例の少ない地域における識字の様相を検討する素材になりうると思われる。そこで本研究では、墨書土器だけでなく硯・転用硯等にも注目して、古代地域社会における識字の様相を検討したいと考えた。

### 2. 研究の目的

西海道を中心に、地域社会における識字と文字文化の展開の様相を明らかにすることを目的とする。その際、木簡や墨書土器など文字の記された資料だけでなく、定型硯・転用硯にも着目し、これらを通して木簡の出土数が極めて少ない地域における文字文化の様相を解明する方法を検討する。そして南西諸島にいたるまでの文字文化の広がりを確認し、それぞれの地域社会における文字使用の具体相を見通せるようにする。

### 3. 研究の方法

西海道の各地域における古代の定型硯・転

用硯を調査する。あわせて古代の陶硯と転用硯に関する研究を整理するとともに、出土遺跡の性格、使用場面の検討を行うことで、文字使用の具体的な場面を考察する。さらに西海道の各地域における木簡、墨書土器等の出土文字資料を調査し、上記の成果と合わせ、識字の様相と文字文化の広がりについて検討・考察する。

また研究協力者の協力を得て、古代出土文字資料データを集成し、学界に提供する。

### 4. 研究成果

(1) 定型硯は、西海道では大宰府跡に圧倒的に多く出土している。大宰府の定型硯の供給元は、おもに福岡県牛頸窯である。また豊前国では早く7世紀初めから須恵器窯跡で定型硯が焼成されており、仏教の伝来とともに渡来系氏族による寺院の建立、それにとともなう硯の使用が考えられる。奈良県坂田寺跡で出土した墨書土器が現在のところ最古のものであるように、律令制施行以前の文字使用は、仏教との深い関わりが、西海道においても想定される。

いっぽう九州南部における古代の定型硯は、宮崎県・鹿児島県とも各20点程度しか確認されてない。そのなかで、宮崎県高鍋町の下耳切第三遺跡で出土した圈脚円面硯は、完形はでないものの優品で、搬入品であることが明白な資料である。この硯と同類のものを探索したところ、大宰府跡や牛頸窯跡、豊前国地域には類例がみられず、愛媛県松山市の須恵器窯出土品に類似することが判明した。宮崎平野部に、西部瀬戸内、なかでも伊予松山方面から、文房具を搬入することがあったことが推測される。これは文字文化の伝播が、大宰府からの一元的ルートにとどまらない様相を示す、興味深い成果である。

また下耳切第三遺跡では、硯は竪穴住居内で出土している。本遺跡は、官衙あるいは寺院等ではなく、終末期の小円墳の近くに掘立柱建物群と竪穴住居群が展開する、有力者の集落遺跡であると考えられる。本遺跡および近辺では墨書土器・転用硯とも出土しておらず、日常的に文字を使用する状況にあったとは考え難い。

(2) 硯は古代中国で発達し、初期は石製であったが、魏晋期に陶製のものが普及するようになり、南北朝期に円面硯の形が完成し、隋・唐期には青磁・白磁や三彩の円面硯、また風字硯も出現する。五代期に至ると風字硯に統一し、宋代以降は石硯となる。

日本列島内での生産は陶邑で6世紀末に始まり、7世紀代には福岡県北九州市の窯でも生産されている。この時期は硯を焼成している窯で寺の所用瓦あるいは仏器関係の容器がみられ、おもな消費地が寺院であったと考えられる。当初の形態は種々の円面硯で、風字硯は8世紀後半から列島内でも生産されるようになり、9世紀には円面硯に置き換わる。石硯は平安時代中期に存在しているが

輸入品であり、鎌倉時代以後に国内生産品が普及する。

定型硯には階層性が指摘されている。最上位に獣脚円面硯あるいは唐からの輸入品であり、次が蹄脚円面硯で、この形態は大型のものが多く、その次が圈脚円面硯で、大型から小型まで最も資料数が多い。その下にその他の無脚硯や中空円面硯などがある。なお階層の最下位が実用本位の転用硯であり、個体数は転用硯が最も多いことは、定型硯が国内で最も多く出土している平城宮・藤原宮でも同様である。このことから、上位の階層の硯については、見る硯、ステータスを示すために置いてあるだけで意味がある硯、すなわち使わない硯であった可能性が指摘されている。上記の下耳切第三遺跡出土の圈脚円面硯は、使用痕跡がわずかで、そのような意味を持っていた可能性も考えられる。

西海道では大宰府において、多種多様な円面硯や、漆が縁に付着している猿面硯など、高級品も確認される。いっぽう九州南部では上位の硯はほとんどない。日向国での定型硯は、圈脚円面硯、中空円面硯、風字硯で、出土は日向国府跡（西都市寺崎遺跡）が最も多く 14 点、そのほかの遺跡では 1 遺跡での出土は 3 点以下に分散している。文字の使用が国の行政事務と密接に関わっていたことが示されている。

(3) 土器転用硯は、平城宮や藤原宮においても出土量が定型硯より多く、それゆえ実用本位の硯とみなされている。これまで墨書土器の集成は各地で進められ、平城宮でも墨書土器のほか定型硯の集成もなされてきたが、転用硯が集成されることはなかった。

研究代表者は、これまで日向国の墨書土器を集成する過程で、数が少ないこともあり、定型硯と転用硯の集成も行ってきた。今回、研究協力者である今塩屋毅行氏・津曲大祐氏の協力を得て、日向国府跡をはじめとする宮崎県西都市妻北遺跡群の出土事例をあらためて集成した。その結果、本遺跡群では定型硯 17 点（円面硯 14 点、風字硯 3 点）、土器転用硯 54 点、転用硯と墨溜め兼用土器 3 点、墨溜め 38 点が確認された。この点数は日向国内の遺跡中では圧倒的であり、国府の文書を用いた行政活動を窺わせるものである。

ただし妻北遺跡群では墨書土器の出土数は 20 点に満たない。日向国内では他に 150 点以上の出土が報告されている遺跡が複数あり、官衙遺跡と集落遺跡では文字使用の様相に違いがあったことが窺われる。

(4) 硯の使用痕跡について、50 倍ルーペを用いた観察により、器壁の多孔質部分に入った墨を確認する方法を用いて調査した。妻北遺跡群出土の定型硯中、硯面の残るものの中には使用痕跡の無いものもあった。また須恵器の蓋・皿・椀のなかで磨耗痕があるものの墨痕の無いものもあった。

宮崎県西都市の宮ノ東遺跡では、蓋や椀の内面に磨耗痕跡があるものの墨痕の無い須

恵器が多く出土している。研究協力者の協力を得て使用痕跡を確認したところ、墨痕の無いものうち 5 点には、線条痕という砥石で研磨した痕跡が確認された。これらの須恵器は、硯として使用できるように調整されたが、未使用のままであった、転用硯であると判断した。宮ノ東遺跡は流通の拠点に立地し、畿内産土師器が出土しており、また日向国府にも近く、国府への供給元であった可能性もあると考えている。

なお、これら官衙および官衙関連遺跡では、定型硯や転用硯（未使用をふくむ）が多く出土するいっぽうで、墨書土器の出土点数は少ない。磨った墨は紙もしくは木簡に書くために用いられたと考えられる。いっぽう 100 点を越える墨書土器が出土している遺跡では、定型硯はみられず、転用硯も少なく、墨溜めがわずかにみられる。多量の墨書土器を出土した集落において、日常的に文字を使用していたわけではないことが、硯や転用硯の出土様相からも窺える。この点でも、集落における文字文化が、官衙・官衙関連遺跡などにおけるそれとは異なるものであったことがわかる。

(5) 研究協力者である永山修一氏が「大隅国出土古代墨書土器集成、薩摩国出土古代墨書土器集成・補遺(1)」を作成し、研究成果報告書に掲載した。これにより 2000 点を越える、奄美諸島を含めた鹿児島県の出土文字資料集成が出来た。また研究協力者である今塩屋毅行氏・津曲大祐氏は、日向国府域の定型硯と転用硯の集成と分析を行ない、研究成果報告書に掲載した。この報告書は国立国会図書館はじめ学界関係者に配付した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

柴田博子、『長門本平家物語』硫黄島配流道行き説話の研究状況、『宮崎県地域史研究』、査読有、26 号、pp.27-44

柴田博子、六朝建康城遺跡出土の墨書磁器について、『古代学研究所紀要（明治大学古代学研究所）』、査読無、18 号、2013 年、pp.93-96

柴田博子、未使用の転用硯、『宮崎考古』、査読無、24 号、2013 年、pp.39-48

柴田博子、古代の日向、『古事記年報』、査読有、56 号、2014 年、pp.5-24

柴田博子、鹿児島県春花地区遺跡群出土ヘラ書き土師器、吉村武彦編『日本古代の国家と王権・社会』、査読無、塙書房、2014 年、pp.513-531

〔学会発表〕(計 2 件)

柴田博子、出土文字資料・文献史料からみた日向、風土記研究会第 9 回研究発表会、2011 年 9 月 10 日、宮崎看護大学

柴田博子、古代の日向、古事記学会第 60 回

大会、2013年6月15日、フェニックス・シーガイアリゾート・サンホテルフェニックス  
国際会議場（宮崎市）

6．研究組織

(1)研究代表者

柴田博子（SHIBATA HIROKO）

宮崎産業経営大学・法学部・教授

研究者番号：20216013

(2)研究分担者

(3)連携研究者